歴史地区や職人たちの町を訪ねたり、時代祭を見たりしました。(写真３、4)

写真３　時代祭１

写真４　時代祭２

非文字資料研究センターのプログラムは、歌舞伎や伝統的な建築物といった、他の多くの表現形式からも日本文化の幅広い経験を得る機会を与えてくれました。これらすべての要素が、芸術品そのものの理解にとどまらず、それらを守り伝え、価値を与える文化的背景をも視覚化し、理解することに役立ちました。

最後になりますが、日本の人々はとてもフレンドリーだといえます。日本の人々は外国人がどれだけ日本の文化を好んでいるかを知り喜ぶとともに、私たちの文化にも興味を示してくれます。私は日本への最初の旅で、日本の皆さんがリオのオリンピックについて質問してくれたことや、私の下手な日本語にも寛大で居てくれたことを思い出し懐かしく思うでしょう。そしてまた、日本での日々の生活や近所の商店街、フィールド調査からの帰りに毎晩私が「ただいま」と声を掛けていた、アパートの隣のお地蔵様を思い出し、懐かしく思うことでしょう。

学問に終わりなし、人情に真価あり

――私の日本訪学記

周　全明
（北京師範大学）

今回の日本への短期訪問研究が決まった時、喜びはあったものの、一方でそれまでずっと民俗学は特定の地域で展開されてきた学問で、その研究のためには必ずしも外国に行く必要がないと思っていたことも事実であった。しかしながら、今回の訪問によって自分は見識を広げ、間違いなく大きな収穫を得ることができた。

到着したその日は宿泊先に直行し、翌日に神奈川大学非文字資料研究センターを訪れた。３日目にチューターの程亮博士と日本滞在中の研究調査に関する打ち合わせをし、４日目に神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科の佐野賢治教授のご指導をいただき、自分が取り組んでいる研究課題「経験と実践―日本民俗文化財保護に関する研究」の調査をスタートさせた。

程さんの流暢な通訳のおかけで無事調査地を訪れ、様々な調査対象の方に話を伺うことができた。佐野先生と山形県にある農村文化研究所理事長の遠藤宏三先生を訪問した後、松戸市立博物館学芸員の青木俊也博士と、文部科学省文化庁文化財調査官の石垣恒氏にそれぞれインタビューを行った。その後、沖縄民俗芸能の上演と第58回関東ブロック民俗芸能大会を鑑賞し、農村文化研究所置賜民俗資料館と米沢市上杉博物館、江戸東京博物館、東京国立博物館、横浜美術館、さらに各地に散在する神社を見学した。

写真１　第 58 回関東ブロック民俗芸能大会

今回の調査を通じて、中日民俗学の学術交流は歴史が長く、これからも明るい未来があるとしみじみ感じた。中国民俗学の草分けといわれる鐘敬文先生は 1930 年代に日本に渡って、日本の西村眞次先生の下で勉強した経験がある。その後、福田アジオ先生と張紫晨先生との親交もあった。このように中日民俗学の交流は展開されてきたのである。社会の発展に伴い、中日両国の民俗学界は無形文化遺産保護など共通した問題に遭遇している。無形文化遺産の保護政策については、中国は日本の経験を学び、両国の学界や政府、国民全体でその応用方法を模索すべきであろう。また、都市民俗学、環境民俗学や工芸民俗学などは地域の学問であると同時に、交流すべき学問でもある。これらの学問は過去を学ぶだけでなく、過程を重視し、未来を開拓する学問でもある。実際に調査を始めて「学問に終わりなし」ということを実感した。民俗学の研究には大量の資料を読破すること以外に、身をもって体験することも要求されているのではないだろうか。

また今回の調査を通じて、中日両国の民間では、深い友情の絆を感じることができた。両国の政府間では、意見や観点が一致しない点があることは事実だが、それが両国民間の交流の障害となってはいけない。わずか 3 週間の滞在であったが、滞在中に日本の人々の熱意と友情を感じて感動した。訪問前に渡航に関する具体的な内容について連絡していただいた事務室の成田紅音女史は、非常に責任感が強い方で繊細で辛抱強く、大雑把な私にとって学ぶところが多い方であると感じた。そして神奈川大学訪学中の指導教官であった佐野先生は、親切かつ謹厳実直で、巨視的な研究視点を持っている方だと思う。先生は筆者の研究計画を細かいところにまで目を通し、具体的なコメントをくださった。さらに、大胆に調査に赴き、躊躇なく問題に向き合うようにと私を励まし、文化財調査官の石垣氏を含む調査対象への連絡にも協力してくださった。先生のおかげで研究が深まり、スムーズに進んだ。遠藤宏三氏は非常に印象深い方だった。山形県米沢市の元市議会議員の彼は、農村文化研究所の理事長を務め、筆者が米沢市で調査した際自宅に泊めてくださった。夜、遠藤ご夫妻と息子さん、そして同行の程さんと一緒にお酒を酌み交わし、遅くまで言いたいことを言い合い、楽しい交流の時間を持つことができた。翌日、別れる際、遠藤先生は自分の着慣れたスーツを贈り物にしてくださった。最後に、神奈川大学博士後期課程に在籍・留学している同胞の程さんについてだが、彼は筆者と同じく中日民俗学の未来に関して似たような見方を持っており、また同じく情熱を抱いている方である。それゆえ、彼と旧友のように打ちくつろいで話し合い、遅くなった出会いを嘆きながら、中日民俗学の交流に自ら貢献したい気持ちを確認し合った。

写真２　山形県農業文化研究所理事長・遠藤宏三夫妻

今回の訪問で心に深く刻まれたものは上述したものだけではない。機会があれば、また日本そして神奈川大学に伺い、学術交流ができることを心から願っている。研究成果発表の際に「来たりし記憶は永遠に残りき、別るる際にも初見の心地たり」という詩句を使って自分の気持ちを表したが、これをもって本文の締めくくりとしたい。

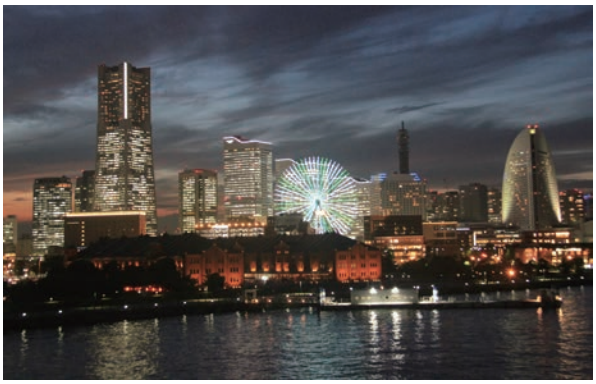

写真３　美しい横浜の夜景